

名詞由来表現の有用性と効果的な語彙表現 — 関連性理論の知見から

文学研究科英語コミュニケーション専攻博士後期課程満期退学
 渋沢 優介

1. はじめに

英語は他言語と比較しても語形成能力に優れた言語であり、語彙も豊富である。その理由として、外来語に対して寛容的で多くの語彙を取り入れてきたこと、品詞の融通性等が挙げられる。語彙を研究対象とする形態論は、人間の言語運用能力について語彙とコンテキストの相互作用といった視点からもアプローチ可能な分野である。本稿では、headlineに用いられている名詞由来表現(N→V)について言語使用、言語運用を研究対象とする語用論における、関連性理論の知見を応用して考察する。新聞等のheadlineでは限られたスペースに①効率よく記事の内容を伝達し、②読者の意識を惹くような強いインパクトを持たせる必要がある。その結果、多用される語彙の特性として、①たいてい一音節で短い、②日常的な用法とはズレのある(比喩的用法が中心である)といった特徴が挙げられる。

本稿の研究目的は、日常的な用法とはズレのある言語表現を、関連性理論の原理を通して、読者はいかにして解釈しているのかについてheadlineに多用される語彙の特性を多角的に分析する。また、名詞由来表現の有用性を提示する。

語用論を、「言語使用、言語運用とその解釈についての理論」と限定的に定義したとしても、語用論として研究されているアプローチはかなりの数にのぼる。語用論研究におけるアプローチの多くは、哲学者Paul Griceに触発された理論を中心に発展を続けてきた。Griceは、語用論に対して哲学的なアプローチを行ったのに対して、関連性理論は、Dan SperberとDeirdre Wilsonによって提起され、語用論の認知的なアプローチをたどり、発話解釈の際に聞き手がたどる心的過程を認知的なアプローチにより説明を試みた。

関連性理論は、「発話解釈において、言語形式とコンテキスト的要素がどのように相互作用するのかを研究する学問分野」とであると定義できよう。言語形式とは、「文」、名詞句、動詞句等の「句」、その句を構成している「語」を指し、音韻論的、統語論的、意味論的視点から、当の文がコンテキストと相互作用し、どのように発話が特定の解釈をされるのか研究

する分野でもある。意味が伝達されるとはどういうことか、コミュニケーションが成立するとはどういうことなのかについて、聞き手（受信側）による解釈のメカニズムを解明しようとするのが関連性理論である。関連性理論は、発話解釈を受信側に立ってその解釈プロセスを説明しているという点で、Griceら言語哲学者によって提起されたアプローチとは異なるという点が特筆すべき点である。語用論の研究目的は、「発話解釈において、文の意味と発信側の意図した意味との間にあるギャップをいかに埋めるか」とするならば、言語使用、言語運用において語彙レベルにおいても同様のことが目的として成り立つ。このことを中心的な目的とするのが語彙語用論であるが、仮に語彙レベルにおける語用論が存在しないのならば、語彙は符号化された概念そのものしか伝達できないことになる。文法により決められた文の意味と、ある状況下で意図された意味との間にギャップが生ずることは一般的なことである。このことは語彙レベルにおいても成り立ち、ある特定の状況下において、符号化された概念と、伝達された概念との間にギャップが存在することは、語彙語用論の基本的な根拠といえる。

2. 関連性理論の原理—伝達と認知

2-1 コミュニケーションにおけるモデルと推論

いかにコミュニケーションが成されているかを説明する方法としてコードモデル (code model) と呼ばれるモデルがある。このモデルでは、送信側が自分のメッセージを発信し (encode)、受信側がそのメッセージを受け取って復号化 (decode) することで、コミュニケーションが成り立つとされている。また、同一のコードを持つ送信側と受信側とが正常に機能し、何らかの理由でコミュニケーションが阻害されない限りコミュニケーションは適切に成立するとされている。

しかし、これまで述べてきたように「文」や「語彙」に符号化された概念と、「意図された概念」や「伝達された概念」との間にはギャップがあることは一般的なことである。もし、コードモデルがコミュニケーションモデルを説明する唯一のモデルであるならば、受信側は（発信側によって）符号化された字義通りの概念のみ解釈可能ということになってしまい、ギャップの説明を適切にすることができない。

人間には「推論能力」が備わっており、コミュニケーションを成功させるためには、推論を働かせ、コンテキストと相互作用した上で適切な解釈をしている。推論によって導き出されるのは、文全体の意味のみならず語彙レベルでも推論とコンテキストの相互作用で適切な解釈を導くことが可能になる。例えば、先に挙げた日常的な用法とはズレのある比喩的用法の表現であっても、当の語彙とコンテキストとを相互作用させたうえで受信側は、適切な解釈を試みている。認知効果、処理コストの概念は、次章以降で詳しく検討していくことになるが、普段とは違う言語表現を使うことで受信側は、認知効果を得ることになる。また、解

積する際に時間もかかるため、処理コストも多分にかかる。関連性理論では、(次章以降で詳しく扱うが)「関連性の認知原理」を前提としており、受信側は自分に向けて発信された情報は、自分にとって最適な関連性を持つものであるという信念のもとに解釈を始める。そしてまず、最も処理コストのかからない、すなわち呼び出し可能性⁽¹⁾の高い想定から順にアクセスしていく。処理コストがかかりすぎる場合や、認知効果の度合いが極端に低い場合はその時点で解釈は放棄されることになる。関連性理論における「関連性」とは、認知効果、処理コストの2つの要素に大きく関わっており、一般に認知効果が高く、処理コストがかからないものを関連性があるとする。

2-2 関連性の原理—認知原理

Sperber and Wilsonによって提示された関連性理論は、認知と伝達に関する2つの仮説に基づくものである。ひとつは、人間の認知機能は、「関連性」を最大化する方向に働くというものである。関連性理論における人間の認知に関する基本的な考え方は、「人間は意識しているといないと関わらず、自動的に可能な限り最も効率的な情報処理を目指す」というものである。この傾向を表したのが関連性の第Ⅰ原理の認知原理である。

関連性の原理Ⅰ (認知的関連性の原理<**Cognitive Principle of Relevance**>) :

Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.

(人間の認知は、関連性を最大にするように働く特性を持つ)

(Sperber and Wilson (1995²) 参照)

2-3 関連性の伝達原理

関連を持つということは、不要な処理コストをかけずに認知環境に変化をもたらすことである。最少の処理コストで、最大の認知効果が得られる場合、その解釈は最適な関連性を持つとされる。ここで重要なことは、受信側が最初にアクセスした想定が、必ずしも処理コストに見合うだけの情報を提示しているとは限らないということである。しかし、発信側と受信側の意図とが一致するのは、関連性の第Ⅱ原理の伝達原理に基づいているからである。第Ⅱ原理は、意図明示的コミュニケーションの原理を表し、以下を参照されたい。

関連性の原理Ⅱ (伝達的関連性の原理<**Communicative Principle of Relevance**>) :

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(すべての意図明示的伝達行為は、それ自体が最適な関連性を持つという推定を受信側に生じさせる)

(ibid.)

一般に意図を明示したコミュニケーションでは、発信側と受信側とがお互いに効率よくコミュニケーションを成立させたいという信念を持っている。すなわち、発信側は、相手のもつ想定のうちで最もアクセスしやすい、最少の処理コストで、最大の認知効果を得られるような言語表現を用いており、受信側もそのつもりで解釈をすすめる。

関連性の伝達原理において注意すべき点は、発信側の言語形式の選択には個々の意図も表現されるという点である。発信側の持つ想定や言語知識もそれぞれであり、全く同じ想定を持つとは考えられない。直接的な表現を好む人もいれば、間接的で皮肉的な表現など受信側にあえて処理コストをかけるような推論的な表現を好む人もいる。

3. 関連性における概念

3-1 認知効果と処理コストの関係

「関連性」とは受信側にとっての影響、認知効果と処理コストの2つの要素に関わる。一般に、処理コストが少なく、認知効果が大きいほど関連性は高くなる。自分にとって関連性があるということは、解釈の際にかけた処理コストに見合うだけの認知効果が得られるということでもある。最少の処理コストで、最大の認知効果を得られた場合、その解釈は最適な関連性を持つという。

認知効果とは、受信側の持つ想定に対する刺激であり、その刺激を通して認知環境に変化が起ることである。想定のコレクションとは実際に意識にのぼっているものだけでなく、想像が可能な潜在的な想定をすべて含み、言語情報以外から得られる情報、例えば視覚情報、聴覚情報、記憶、推論等からも関連性の概念は得られる。また、処理コストにも関連性に関わっており認知効果と処理コストの関係を以下のようにまとめることができる。

〈認知効果〉

- (1) 不確かなコンテキストを確定化（強化）する場合
- (2) 既存のコンテキスト的想定と矛盾し、誤った想定を放棄する場合
- (3) 既存のコンテキスト的想定と結びつき、コンテキスト的含意を引き出す場合

（東森・吉村（2003）参照）

〈処理コスト〉

- (1) 最近使われたかどうか：より最近に使われた語、概念、音声、統語構造、コンテキスト的想定で、これらが用いられていれば、必要とされる処理コストは少なくなる。
- (2) 頻繁に使われるかどうか：より頻繁に使われる語、概念、音声、統語構造、コンテキスト的想定で、これらが用いられていれば、必要とされる処理コストは少なくなる。
- (3) 言語的複雑性：より複雑な語、概念、音声、統語構造、音声構造が用いられていれば、

必要とされる処理コストは大きくなる。

- (4) 論理的複雑性：否定語を含む表現、否定表現は肯定表現に比べて処理コストがかかる。
(今井 (2009) 参照)

3-2 アドホック概念の形成

関連性理論ではCarston Robyn (2002) 以降発話レベルでの解釈のみならず、語彙レベルの解釈にも関連性の原理が働いており、アドホック概念の構築⁽²⁾は特に語彙レベルの解釈に大きく関わっていると考えられる。語彙によって符号化された概念と、伝達された概念との間にギャップが存在することは、先に述べた通りである。語彙レベルにおける語用論(語彙語用論)の妥当性は認められるべきであり、受信側はアドホック概念の構築により、関連性の原理に基づいて解釈を始める。また、コンテキストごとにその場限りにおいて最も適切な解釈を得た時点で関連性の追求は終了する。

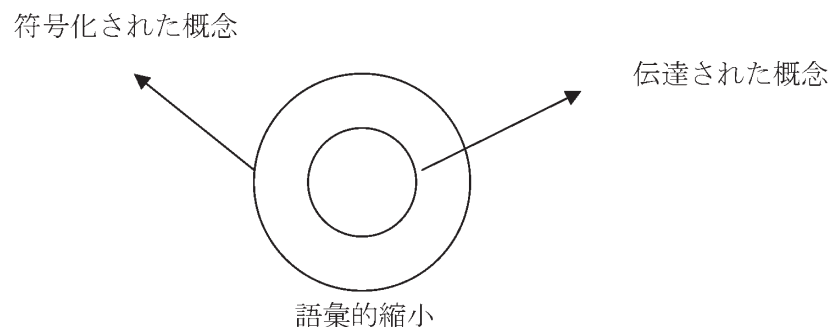
このアドホック概念の構築には、主に語彙的拡張(broadening)と語彙的縮小(narrowing)という2種類の方法が認められる。名詞由来表現は、日常的な言語形式とはズレがあることを考慮すると、特に語彙的拡張と深い関係があると考えられる。

3-3 アドホック概念と語彙的拡張、語彙的縮小

まず語彙的縮小についてであるが、語彙的縮小とは符号化された意味よりも伝達された概念のほうが特定のであり、狭められた場合のことを指す。以下の例文を参照しながら具体的に検討していく。

- (1) お金がないから買い物に付き合えない。

- (1) では「お金がない」に注目すると、人はいくらのお金は持っていると考えerほうが一般的で、全くお金を持っていないとは考えにくい。つまり、ここでいう「お金がない」とは一緒に買い物に行くだけのお金がないという意図であり、全くお金がないという意味ではない。つまり、符号化された概念である[お金]が狭められて[一緒に買い物に行けるだけのお金]という伝達された概念を受信側が構築していると考えられる。語彙的縮小は以下のように図示できる。

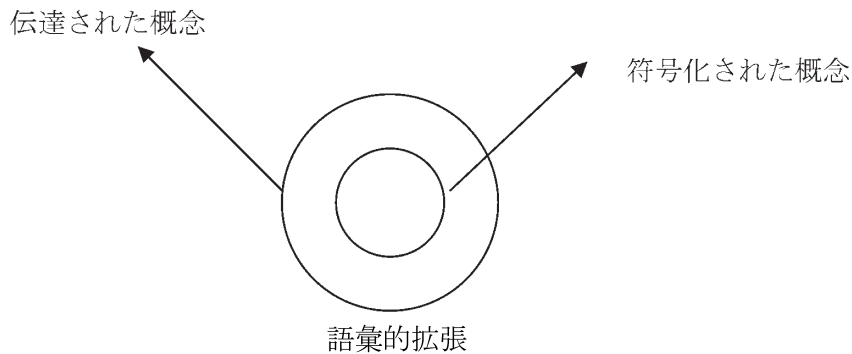


次に語彙的拡張についてであるが、語彙的拡張とは先に見た語彙的縮小とは対照的で、符号化された概念よりも伝達された概念が拡張された場合を指す。語彙的拡張は、符号化された概念では収まりきらないような物体、出来事、行為等が収まるまで伝達された概念を拡張していく。この語彙的拡張は近似表現、カテゴリ拡張、隠喩等によく見られる。

(2) 昨日のパーティーには100人ほど集まった。

(2) では厳密に参加した人数は、101人だったとする。この場合、厳密な人数を伝えるよりも何人参加したのか、意外なことに事前に見込んでいたよりもかなり多くて驚いたことの伝達が、主旨であるならば正確性よりも概数を伝えるだけで十分である。

つまり、101人という符号化された概念を緩めて、伝達された概念100人を受信側は構築する。語彙的拡張は以下のように図示できる。



4. 名詞由来表現の解釈プロセス

ここまで関連性の原理に関して概観し、アドホック概念の用法についても言及した。本章以降では、headlineに用いられた名詞由来表現を分析し、読者のたどる解釈プロセスについて言及する。

4-1 headlineの分析

(1) Chinese firms *eye* mass production of Li-ion car batteries

中国勢、車載用リチウムイオン電池の量産視野に

(2) Nations *eye* \$41 tln infrastructure pie

各国が注目 世界のインフラ 投資総額41兆ドル

(3) Regional firms *eye* East Asia mkt

域内企業 東アジア市場に注目

『ジーニアス英和辞典』（第4版）によるとeyeには名詞、動詞として以下の定義がなされている。

1. 目、眼球、目もと (n)

2. 視覚、視力

3. 目つき、まなざし、視線
4. 注視、眼識、監視の目
5. 観点、見方、判断等

1. (悪意・疑い・好奇心から) じろじろ (注意深く) 見る (vt)

1. じっと見る (vi)
2. 注意深く見る目 (穴) をあける等が挙げられている。

本節では具体的に、eyeが動詞として用いられているheadlineを分析する。(1) ではeyeを「視野に入れる」という意味を、(2) および (3) では「注目する」という意味を持つ。読者はheadlineにおいて、eyeについての適切な解釈をするためにまず、語の辞書的な意味と文構造だけで表される意味内容⁽³⁾を理解する。

さらに、当の語の持つ、または持ちうる想定、百科事典的知識にアクセスし、最も関連性の高いものに特定する。人間は知りたがりであり、また知らせたがりでもあるという特性に基づくのが、関連性の第I、第II原理である。最少の処理コストで、最大の認知効果が得られる場合、最大の関連性があるとするが、人の持つ想定は個人によって異なるのが通常で、最初にアクセスした想定が必ずしも最も関連性が高いとは限らない。また個人の持つ想定には程度の差も認められるが、この点は語用論的な推論によって論理形式を補完する。

具体的には、まずeyeの品詞を動詞と特定し、eyeの持つ機能、役割から「見る」という意味を導く。さらに、論理形式から、主語はChinese firmsであり、目的語が車載用のリチウムイオンバッテリーであることから単に何かを「見る」というよりはむしろ、将来のことを見据えて「視野に入れる」が適訳ではないかと思当をつける。当の名詞だけでなくコンテキストと相互作用させ、eyeの持ちうる多義性の中から適訳を選択している。⁽⁴⁾

このように、コンテキストに応じて語の意味を拡大させたり、縮小させたりしてその場に合う適切な意味を導くためにアドホック概念を構築している。アドホック概念の構築は、関連性を求めるがゆえのことであるといえる。

(4) Dubai *faces* hurdles to full recovery

ドバイの完全復活 イバラの道

(5) Semiconductors *face* another barrier to break, this time physical

半導体メーカーは新たな課題に直面、今度は物理的な問題

faceに関しても同様である。辞書には受け止める、直面する等の意味が載っている。face

の辞書的意味、文構造から得られる論理形式を理解し、百科事典的意味にアクセスし最も関連性が高い情報を特定する。「顔」の位置や特質構造でいう機能からもアドホック概念を構築し、適切な解釈を導く。

この他にもhead/ nose/ mouth/ shoulder/ elbow/ hand /foot等の身体名詞が多用される傾向にある。解釈の際には、これら名詞の位置や機能から「率いる」、「(においを) 嗅ぐ」、「ささやく、口を動かす」、「かつぐ」、「肘でつつく」、「手渡す」、「踏む」等の解釈が可能であろう。身体名詞の他にも、日常的に使う道具や、生活語彙も多用される傾向にある。

名詞由来表現を適切に解釈するためには、当の名詞についての一般的想定に加え、名詞の持つ特質構造の知見も一助になると考える。生成語彙意味論では、語彙はいくつかに分解されており、なかでもPustejovsky (1995) は名詞の意味的特性を詳しく検討し、特質構造という概念を提唱している。名詞の特質構造は、名詞の持つ意味的特性を示すもので、以下の4つから成っている。

- a. 構成クオリア (Constitutive Qualia) : その構成要素が何であるか
- b. 形式クオリア (Formal Qualia) : それと他とを識別する特性が何であるか
- c. 目的クオリア (Telic Qualia) : その目的や機能は何であるか
- d. 主体クオリア (Agentive Qualia) : それがどのように生み出されたか

具体例として「本」と「車」を挙げて特質構造について詳しく述べていく。構成要素とは、材料、部分などそれが何によって構成されているかに関する情報である。「本」を例にとると、紙とそこに書かれた情報から成っている。また、形式は、形状等、その分類に関する特徴であるので「本」に関していえば、印刷物といえる。「本」の目的は読者が情報を読むということであり、「本」は筆者が情報を書くことによって作り出されるもの（主体）である。

もうひとつ、「車」の特質構造は次のようにまとめられる。車体やタイヤ等から構成されており、乗り物の部類に入り、運転して移動することが目的であり、自動車会社が製造することで作り出される。このように、特質構造とは当の語を様々な観点から多角的に記述した意味表示である。

(6) Top drug chain *lures* China

ドラッグストア最大手、中国人客を取り込む

(7) Kansai firms *lure* Chinese tourists

関西の企業、中国人観光客を引き寄せる

(8) Easy-to-use, feature-rich digital audio recorders *lure* hi-fi lovers

使い易く多機能なデジタルオーディオレコーダー、Hi-Fi愛好家を引き付ける

アドホック概念の構築、名詞の特質構造をふまえてlureを例に解釈プロセスを考察していく。これまで述べてきたように読者は、headline特有の日常的な用法とはズレがある比喩的用法であっても、関連性を求めて当の語の意味を論理形式から理解しようとする。呼び出し可能性の高い意味から解釈を始めるのが通常であるが、最適の関連性を得られるまで解釈を進める。その際、関連性の原理、アドホック概念の構築、名詞の特質構造を手掛かりに適切な解釈を得ようとしている。

lureには、名詞として魅力あるもの、冒険の魅力、人を引きつける魅力、おとり、(魚釣りの) 疑似餌等の訳語が、動詞としては誘惑する、おびき出す等の訳語が挙げられている。(6) のheadlineでは「取り込む」、(7) では「引き寄せる」、(8) では「引きつける」が適訳と考えられる。読者はlureを適切に解釈するために、辞書情報にはないレベルで想定、百科事典的意味にアクセスし、コンテキストも考慮に入れたうえで推論を働かせ適切な意味を考える。そのプロセスのなかでlureの目的クオリアから、「獲物を捕えるために魚釣りで用いる疑似餌」にアクセスする。コンテキストを考えると、魚釣りとは無関係であり、lureの持ち得る想定を拡張させ、疑似餌は魚を引きつけるため((6) では中国人客、(7) では中国人観光客、(8) ではHi-Fi愛好家)の役割であり、アドホック概念の構築、語彙的拡張によってコンテキストに合う適切な解釈を導き出している。

(9) New material *blocks* 100% of UV rays

紫外線を100%遮蔽する新材料

blockの目的クオリアからアドホック概念を構築させ、推論すると「何かから防御する」、「守る」等の意図が導くことが可能であろう。さらに、目的語になる名詞には「紫外線」があることから、やはり「(肌を) 守る」が適切であったと考え、最適の関連性が得られたとしてここで解釈が終了する。blockについてもアドホック概念の構築、語彙的拡張、推論のプロセスを経て適訳を導いている。

5. おわりに

本稿では、headlineにおける名詞由来表現の解釈について、関連性理論の枠組で多角的に分析した。headlineでは限られたスペースで効率よく記事の内容を伝え、(1) 読者の意識を惹き (attention)、(2) 関心を持たせ (interest)、(3) 当の記事を読みたいという気持ちを起こさせ (desire)、(4) 記憶に残し (memory)、(5) 読ませる (買わせる) (action) という、認知→感情→行動に読者を運ぶ必要がある。そのため短く、強いインパクトがある語彙

選択、最適の関連性を持つ表現が望ましい。

しかしながら名詞由来表現の使用は日常的な用法とはズレがあり、比喩的用法が中心で通常の場合と比較しても処理コストがかかる。headlineの役割を認知→感情→行動に訴えかけることであるとするならば、あえて読者に処理コストをかけることで記憶に残りやすくするような工夫をする必要がある。このことはこれまで述べてきた関連性の原則に矛盾するように思えるが、「間接性」「付加的認知効果」という点から理由付けできる。

名詞には絵に描けるような具体的な視覚的イメージ性があり、名詞の持つ個体や物質等の概念に比較して、動詞の表す行為や動作は明確な構成要素に分解することは困難であるという、特質構造の視点からも名詞由来表現の有用性が認められる。関連性理論では、言語情報以外から得られる情報、例えば外的な刺激である視覚情報や聴覚情報、記憶、推論等の内的刺激にも関連性があるとしている。

名詞由来表現を解釈する際、言語情報に加え視覚的イメージ性が読者の持つ想定を刺激し、認知効果をもたらす。馴染みのある語彙でも用法の面では日常的な用法とはズレが認められ、その場における最適の解釈をアドホック概念構築し、推論を働かせてその場に合う適切な解釈を導き出す。

最少の処理コストで書き手の意図にたどりつくわけではないが、headlineの役割としてはあえて処理コストをかけることになるが合理的である。認知効果とは、想定に何らかの刺激を与えて認知環境に変化をもたらすことであるが、想定には想像可能な潜在的なものも含まれる。

一般的な語彙を新しい意味で用いる比喩的用法がheadlineでは多用されるが、それが適切に解釈されるのは関連性の原理（第Ⅰ原理、第Ⅱ原理ともに）に加えて、アドホック概念の構築、クオリアの理解が関わっている。一時的なその場限りの意味を持つ臨時語や、一般的な語彙に新しい意味を持たせ語彙上の不足を補う濫喩の理解にも同様の原理が働いていると考えられる。

名詞由来表現を用いることで、読者に処理コストをあえてかけ、コンテキストと相互作用させ推論を働かせる。内的刺激（記憶、推論等）だけでなく外的刺激（視覚情報、聴覚情報）も与えることで複数の認知機能に働きかけることになる。このことにより、記憶に残りやすくなり、headlineにおける名詞由来表現は、語彙を経済的に使用し関連性を高めるための工夫であると考えられる。

注

-
- 1 情報の取得や検索、記憶からの呼び出しについての容易さの程度を指し、ある刺激を与えることでその刺激から情報を引き出したりすることがどれほど容易にできるかという度合い。

- 2 符号化された概念と伝達された概念が異なることは、アドホック概念の構築のうち語彙的縮小、語彙的拡大として言及したが3つ目の概念として転嫁的用法と呼ばれるものもある。これはその語の持つ概念の内容を発信側が十分に理解する必要もなければ是認する必要もなく、そのような内容を他人が持つと考えることを指す。
- 3 語彙の辞書的な意味や文構造のみで表される意味内容を論理形式とよぶ。
- 4 多義性のある語彙の語義からひとつを選択することを曖昧性の除去とよぶ。

参考文献

- 東森 勲・吉村あきこ (2003) 『関連性理論の新展開』(英語学モノグラフシリーズ21)
東京: 研究社.
- 今井邦彦 (編) (2009) 『最新語用論入門12章』東京: 大修館書店.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』東京: くろしお出版.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive Grammar — A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press
- 増田秀夫他 (1999) 『現代英語学入門』東京: 聖文社.
- Nicholas Allott 今井邦彦 (監訳) (2014) 『語用論キーターム事典』東京: 開拓社.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』東京: くろしお出版.
- Pustejovsky, James. (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press, Cambridge
- Quirk, R.,S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language*. London. Longman.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995²) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford:Blackwell. (D. スペルベル、D.ウィルソン著、内田聖二他訳 (1999))
『関連性理論—伝達と認知』(第2版) 東京: 研究社.
- 高橋英光 (2010) 『言葉のしくみ』北海道大学出版会.
- 内田聖二 (2011) 『語用論の射程』東京: 研究社.

The Usefulness of De-nominal phrases and effective Word Expressions: Using the Framework of Relevance Theory

SHIBUSAWA, Yusuke

English is flexible in its use of words, which is a highly important point compared to other languages. In English, a word can be used in more than two parts of speech, which enriches English expressions.

In this paper, I will make some remarks on the usefulness of denominal verbs used in headlines within the framework of Relevance Theory from various perspectives. Words used in headlines, such as those with short, high impact and having the most appropriate relevance, are preferred. Relevance Theory was proposed by Dan Sperber and Deirde Wilson. It is a theory describing the process of interpretation from the place of listeners or readers. Relevance Theory is based on two basic principles, which are the cognitive principle of relevance and the communicative principle of relevance. Denominal verbs used in headlines have some deviations from those used in everyday usage.

There are many research approaches in pragmatics. Sperber and Wilson approached pragmatics from a cognitive point of view. One of the purposes of pragmatics is to determine how to infill the gap between the literal and intended meaning in utterance interpretation. The same purpose would work out on a lexical level, which is referred to in lexical pragmatics.

Wilson and Carston claim that the concept intended by words may be pragmatically adjusted and constructed as an ad hoc concept which is part of the pragmatic process of interpreting speaker meaning. This inferential process facilitated through Relevance Theory is called ad hoc concept construction. Readers make ad hoc concept constructions through which they can interpret the appropriate meaning in the deviations within everyday usage.

Nouns have a visual influence on our cognitive functions, which is the key to attract readers' attention. Using denominal verbs, editors assist readers processing effort. They also call readers into action by inference.

Editors provide not only the internal stimulus (memories inference) but also the external stimulus (visual information audio information), which works on a number of cognitive

functions. Using denominal verbs is a device to use words economically, and to enhance readers' relevance.